



金閣は本当に金で造ってあるの

1万枚の金ぱくをはった

室町時代の3代将軍だった足利義満は、1397年、40才のときに京都の北山に、北山山荘を造りました。そのなかで、もっとも力を入れた建物がこの金閣でした。

義満は、金閣の二層と三層のらんかんや床、かべ、天井などの木の部分に、金ぱく(金をうすくのばしたもの)をはったのです。金ぱくは建物全体で、およそ1万枚も使ったということです。これほど多くの純金を集めるのは、たいへんなことだったので、義満は全国に号令をかけて、金をほらせたということです。

「この建物を自分の供養をするための寺とせよ」という遺言を残して、義満は51才でなくなりました。そして、この建物が鹿苑寺金閣とよばれるようになるのは、それからのことです。

現在の金閣は、純金をたくさん使って金ぱくをはりかえたもの

その後、長い年月のうちに、金閣はたびたび修理がくり返されましたが、1950(昭和25)年には、放火によって焼けてしまいました。しかし、5年後にはもとどおりに再建されました。

また、1987～1988年にかけて修理が行われ、たくさんの金ぱくを使って、りっぱな金閣に生まれ変わりました。(監修・田代 脩)

